

オーストラリアの旅 (15)

花尾省治

オーストラリアの旅日記もここらで一応しめくくりにしたい。今一度旅の行路をふりかえって見ると東南アジア諸国のうちマニラ（フィリッピン）とボルネオのタラカン（インドネシア）に寄港しオーストラリア（シドニー、メルボルン、アデレード、ポートリンカーン）を歴航した。

今や世をあげて宇宙時代といった感があり、水爆実験、原子力発電、人工衛星、月世界へと飛んでいつている。しかし同じ地球でもまだ文明から切り離され未開発の資源にうずもれている後進国が日本の身近にある。それは豊かな雨と日光に恵まれ緑の木々に包まれている東南亜の国で長い間の植民地でまだ独立後日もなお浅く若い国である。

これ等の国は今後日本と経済提携の緊密化を図らなければならない。特に農業においては原始的略奪農法を行っているので、その生産を高めるため日本の技術を導入し科学のメスを入れ後進熱帯農法の改善を営んでいる。

東南亜の島伝いに南下し島のつくるところにオーストラリアがある。南十字星の下で大きい国で、しかも新しい国である。気候は一概にはいえないが東海岸から南にかけて特に恵まれた地帯であり政治、経済、文化、産業の発達と、実にすばらしく豊かな文明国をつくりあげた。即ち1788年シドニーに上陸した最初の移民から200年を出ずして農業国として羊毛は世界一の座につき、小麦は4大輸出国の1つとなり、又牛肉、バターは輸出国として大きい地歩を占めている。ただ人口が少なく面積が広い従って農業は機械力にたよった農法を行っている。道路もすばらしくよく田舎道に到るまで舗装され自動車の多いことも特徴の一つといえる。

オーストラリア人の中にはまだ日本人に対する戦争の悪夢の感情が心の隅に残っている者もあるとい

えるが、日本との関係が深まると共に次第にこの感情もうすれ去るものと思う。日本には小麦、羊毛が輸入されており、牛肉についても輸入が自動承認制になって以来、30年に1,300トン。31年には一躍2,400トンとぐっとはねあがって2倍近くなり本年は7,000トンが3月に9月までのオーストラリア輸出わくを買い尽したといわれている。これは日本人の肉消費が増えたのと矢張りオーストラリアの牛肉が少し位まざくとも値段の安い点に魅力があるので輸入が増えたものと思われる。日本製品も陶器、漆器、鉄材の外にオーストラリア向製品を出すように同国との通商促進を大いに図らねばならない。

日本人は米を腹いっぱい食べる大食漢であるのに引きかえ、カロリーの高い肉とバターを充分取り僅かなパンで充分体力を養い、いつまでも若々しく健康である。人口の多い日本であるが飲食店の種々雑多なものが多いのにオーストラリアでは食堂、簡易なバーがあるに過ぎない。勿論ハシゴ歩きのあげく酔眼もうろう千鳥足といった連中は見受けられない。

凡ゆる恩恵にあるオーストラリアであるから衣食住の心配もなく太陽に恵まれた気候で暢気で楽観的であるが、しかし都市を遠く離れた農民は機械と取りくんで懸命に土作りを行っており、土地から草を作り羊毛、バター、肉の生産をしている。

今次の戦争が日本を認識させたことにもなるがオーストラリア人の日本観光団も年と共に増えつつあるといえる。この観光団の中の相当数は労働者が占めている。はみ出る人口を養っている日本では同じような生活は望めもしないがせめて働く仕事だけでもあってほしいものである。